

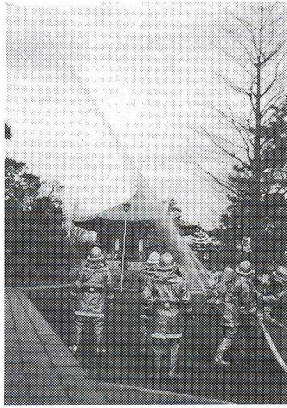
ねりまの文化財

練馬区教育委員会
社会教育課
(文化財係)
☎ 3993-1111 内線 2766
〒176 練馬区豊玉北6-12-1

みんなで守ろう文化財

1月26日は文化財防火デーです

昭和24年1月26日に、法隆寺金堂壁画が焼損したのをきっかけに、この日が「文化財防火デー」と定められ、全国で文化財防火運動が行われます。区内では、各消防署により、消火訓練を行う予定です。多くの区民の皆様



▶ 昨年の文化財防火デー（長命寺にて）

の見学をお待ちしています。
なお、日時、場所等については、各消防署又は、文化財係までお問合わせください。また、各会場にて記念品を配布します。

練馬区文化財保護審議会 委員要項

練馬区では、区内文化財の保護・保存を図るため、練馬区文化財保護条例を昭和61年3月に制定し、条例に基づき同年12月に学識経験者で構成した練馬区文化財保護審議会を設置しました。練馬区文化財保護審議会による答申に基づき現在まで、9件を区指定文化財とし、75件を区登録文化財として各々指定・登録しています。

この度、平成4年12月10日付けで、次の8名の先生方に練馬区文化財保護審議会委員を委嘱しました。任期は2年間です。

会長は、品田稷氏、副会長は福田アジオ氏が就任されています。

順不同・敬称略（かつこ内は、専門・主な経歴）

玉口 時雄
(考古学・元東洋大学文学部教授)

浅井 潤子
(日本近世史・神奈川大学講師)

山崎 弘
(建築史・工学院大学工学部教授)

品田 稷
(生態学・国際武道大学一般教育部教授)

福田アジオ
(民俗学・国立歴史民俗博物館民俗研究部教授)

柴辻 俊六
(日本中世史・早稲田大学図書館員)

渡辺 伸夫
(日本芸能史・早稲田大学演劇博物館員)

武田 光一
(日本絵画史・新潟大学教養部教授)

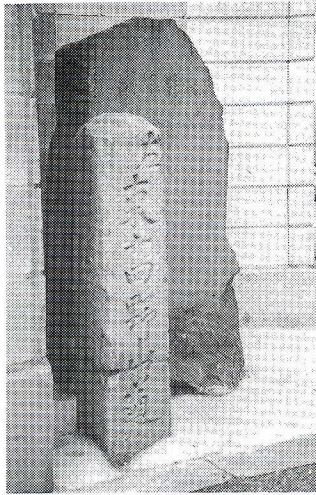
講座のご案内

2月下旬に、文化財特別講座「古墳をさぐる―関東の古墳」(4回講座)を実施する予定です。詳しくは、2月1日号の区報をご覧下さい。

東高野山道

文化財保護推進員 岩崎美智子

練馬区内には東高野山道と呼ばれている道があります。高野台三丁目にある東高野山・長命寺へ参詣する道のことです。長命寺は江戸時代中期から、信仰厚い人たち、行楽の人たちで賑わいました。路傍のあちこちに今も残る「東高野山道」と刻まれた石造物は長命寺へ向う人たちへの道案内となっていました。東高野山道は各方向から幾筋もありました。それらは、富士大道から分岐する道、清戸道から分岐する道、所沢道から分岐する道、中村の南蔵院からくる道、高松からくる道、土支田からくる道などです。ここでは清戸道の貫井で分岐する道を御紹介します。

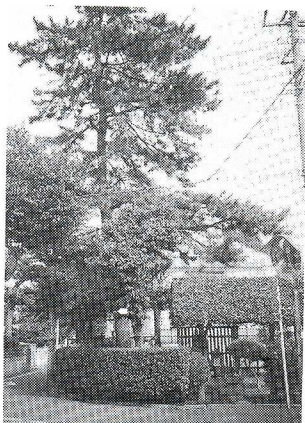


▶ ① 東高野山碑と道標



▲ ③ 庚申塔と地蔵2基

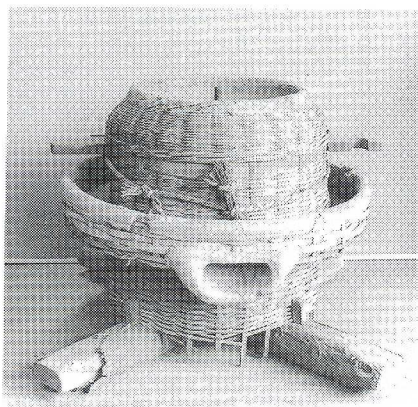
貫井を通る清戸道は一部目白通りになっています。貫井五丁目の円光院の前を通り、目白通りの坂を上ると、練馬第二小学校の向い角に二基の石造物が建っています。一つは東高野山碑(寛政十一年・一七九九)で、側面に「左・高野山十八丁」と刻まれています。並んで「左・東高野山道」の道標(寛政十一年)があります①。ここが東高野山道の現在の出発点です。目白通りが昭和三十年代に伸長されるまでは、ここから十メートル程南の車道の中で、東高野山道が清戸道から分岐していました。その角にこの二つの石造物が今より少し東を向いて建ち、そこが東高野山道の起点になっていました。



▲ ⑤ 地蔵2基

目白通りの信号を渡り、歩道を八十メートル程行くと左に斜めに入る道があります。これが東高野山道です。ここから先は昔からの道を歩くことが出来ます。百二十メートル程行くと赤い鳥居のある須賀神社の脇に庚申塔(元禄十五年・一七〇二)があります②。その先の分れ道のまん中に庚申塔(寛政十年・一七九八)と地蔵二基が建っています③。庚申塔の右側面に「此より右・東こうや道」と刻まれています。これに従い右に行きます。百五十メートル程先の赤い電話ボックスの所に、以前は庚申塔が二基並んで建っていました④が、平成元年に、建物の改築のため、円光院の山門前左側に移されました。信号のある十字路を越えて行くと、南光幼稚園があります。その北西角に樹木に囲まれて地蔵二基(貞享五年・一六八八)(年号不明)が祀られています⑤。ここに長命寺の末寺の南光院があつたそうです。右手に農家の屋敷森を見ながら進むとT字路になります。

郷土資料室収蔵品シリーズ 第14回



唐 臼

「寛永元年の比もろこしより、土にて作るうす作り、長崎に來り、日本の人に作りて見せ、それより本朝につくり習、今木うすするなり。」さらにその能率について、「冬の日一日に、木うすにて八壺石程するに、唐うすにて八三石程ひくなり。然とも費多きものとかなかえたり。」とある。

このように、唐臼は江戸初期にわが国に伝わり、木臼と比べて能力は三倍もあるが、砕け米になって、むだが多かったという。

唐臼は石臼と同じ原理をもち、杵からその殻をはずすのに使われ、糞摺り臼ともいう。その形態は、上臼と下臼及び腕木とからなる。上臼の下部と下臼の上部には刻み目があり、それに擦られて糞殻がはずされる。

正面に馬頭観音(天明六年・一七八六)が祀られ⑥、像の左肩に「左・東高野山道」と刻まれています。これに従い左に行きます。すぐに右に入る道がありますが、この道と次の道は住宅の増加に伴いあとから出来た道です。三本目を右に入ります。

つき当たりを左に曲がり、坂を下って行く

と、前方の石垣の上に稲荷神社が見えてきま

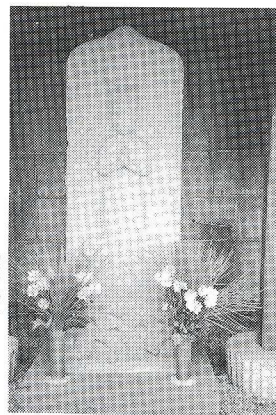
す。稲荷神社と手前右角の庚申塔(宝永六年一七〇九)⑦の間を右に曲がります。稲荷神社の角には東高野山道を示す道標が建てたさうですが、昭和二十年代にどこかへ移されたまま所在がわかりません。この地点で、御府内八十八ヶ所参りで、中村の南蔵院からくる道と合流します。

刻み目に、かし・なら・けやきの薄い板を立てて、すき間には粘土に食塩などを混ぜて固める。外周は、板や竹かごのように編んだもので包む。白が重いので、二人以上で回すのが普通であった。

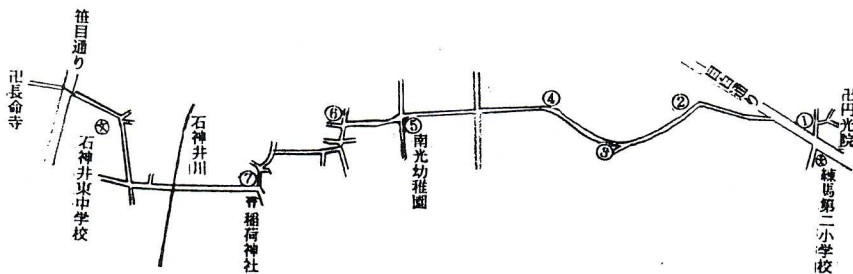
その由来については、『百姓伝記』(天和二年)に「糞をうすにて摺、米となす事」と題して次のように記している。

坂を下り、

石神井川を富士見橋で渡ります。以前は石神井川の両側に水路が引かれ、水田になつていました。十字路を右に曲がり、石神井東中学校の角で左に曲がります。坂を上ると、笹目通りの向う側に、長命寺の東門への参道があります。



▲⑥ 馬頭観音



節分

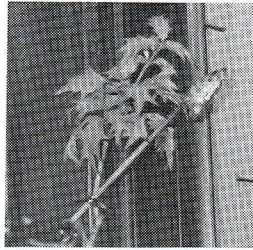
文化財保護推進員 長坂淳子

二月に入ると暦の上では春を迎えます。冬から春へ移り変わる立春の前日を「節分」と言い、豆まきが行われます。

上石神井、下石神井地区で昔から伝えられ、現在でも、わずかに行われている節分の行事があります。

二月三日の夜、目刺しの頭だけを豆がら、あるいは、なすとか菊の枝に刺し、唾をはきかけながら、「大根の虫もココロコ、人参の虫もココロコ」とか「菜っ葉の虫もチリチリ、畑の虫もチリチリ」「大根の虫の口を焼く」等と唱えながらあぶります。虫の口焼きと言い、農作物に悪い虫がつかず、豊作であるようにとの願いが込められています。

これを柁ひょうと共にトンボグチ(玄閼)、物置、鳥小屋等の戸口に差して置きます。魔除けの風習のようです。



豆まきの大豆は、炮烙ひょうらくで煎り、一升枘しやうまきに入れ、大神宮様に供え、その間、主人は風呂に入り、身を清め、豆まきをします。

はじめ家の中で「福は内、福は内、鬼は外」と言っまき、家の周囲、次に近所の神社、稲荷まで出掛けてまきます。

豆まきが終わると、年の数だけ豆を食べます。福茶といって、急須の中に豆を入れて、お茶を飲むところもあります。その時に細く長くと言う意味を込めて、うどんを食べるところもあります。

豆まきの後の豆を神棚にあげて置き、雷が鳴った時に食べると雷除けになるとも言われています。

節分は、豊作を願い、一年間の無事を祈る農家の切実な心が込められている行事でした。今ではこのようなことは殆ど行われなくなりました。しかし豆まきは、小さい子供たちと一緒に楽しめる行事として変化し、生活の中に息づいています。

雛祭

文化財保護推進員 檜山月子

西大泉のある旧家で、節句の日に嫁さんに菱餅ひょうもちと蛤かきを持たせ、実家に行かせたという話を聞きました。同地区の小林きよさんは、「長女が生まれると嫁の里では、内裏雛を祝い、仲人も雛様を祝う(暮れには羽子板を祝う)」という風習があります。次女以下になる

と嫁ぎ先の親が、おかつば頭の座わり雛(俗に三角雛という)を田無のダルマ市で求め、長女の雛様の下段に並べ節句を祝いました」と語っておられました。

古老の聞きがきにも明治時代の練馬の生活として、谷原の小林辰五郎氏が『三月三日、雛祭、嫁・婿は実家へ、干いか干鰯ほしなを持っていく』と記しています。

桃の節句の情景は、源氏物語や枕草子等の古典にも見ることができます。

雛祭は、かつて雛遊びといい、神遊びのことで、神棚を作り神を迎えて災厄を払い、少女たちの健やかな成長を願うことを指していました。また、雛を川や海に流したのは、人間の身代わりに災厄を負っていつてくれるという信仰からです。時代と共に神性をおびた立ち雛が、人形美を整えた座わり雛に変化した。夫々の家庭で愉しむ桃の節句となりました。



それは、幼い者へ注ぐ愛の祈りと人形遊びの美意識が溶け合った日本独特の優美な行事といえましょう。

▶橋本澄夫氏から
練馬区郷土資料室に寄贈されたもの。